

姫路城 《白鷺城》



姫路城は法隆寺とともに1993年12月11日、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の世界遺産リストにその名が登録されました。世界150余か国・550以上の文化遺産・自然遺産とともに、世界に広くその素晴らしさが伝えられ、かけがえのない「人類の宝」となりました。そして2001年には、国宝指定70周年、築城400周年を迎えました。



国 宝	大天守、東小天守、西小天守、乾小天守、イ・ロ・ハ・ニ・の渡櫓（やぐら）の8棟
重要文化財	化粧櫓、二の櫓、折廻り櫓、備前門、水の一門、水の二門、菱の門、い・ろ・は・にの門、ぬの門など74棟



千姫の小径



姫路城にまつわる人物としてすぐに名が上がるのが千姫です。千姫は慶長二年(1597)四月十一日、二代将軍徳川秀忠とその正室との間に生まれました。

千姫はわずか7歳で、豊臣秀吉の子、秀頼に嫁ぎます。この結婚は徳川家と豊臣家の結びつきを強めるためのもので秀吉の遺言による政略結婚であつたと言われています。

やがて豊臣家と徳川家の争いが起こり、大阪夏の陣で大阪城は炎上しています。この時、千姫の祖父である家康の計らいで大阪城内に居た千姫は助け出されます。

その後、江戸に帰る途中、桑名城主本多忠政の子・忠刻(ただとき)と運命的な出会いをすることになります。一度夫に先立たれた悲しみを持った千姫の気持ちを察し、忠刻に想いを知った家康は、二人の結婚を認めます。

こうして、本多家が姫路城の城主となり、千姫も姫路城の姫となりました。

やがて千姫と忠刻との間には一男一女が生まれ、二人はとても幸せな時を過ごしていました。しかし、その幸せも長くは続かなかったのです。

わずか三歳にして、長男の幸千代が病気で亡くなり、さらに忠刻も病に倒れ、三十一歳という若さで亡くなりました。

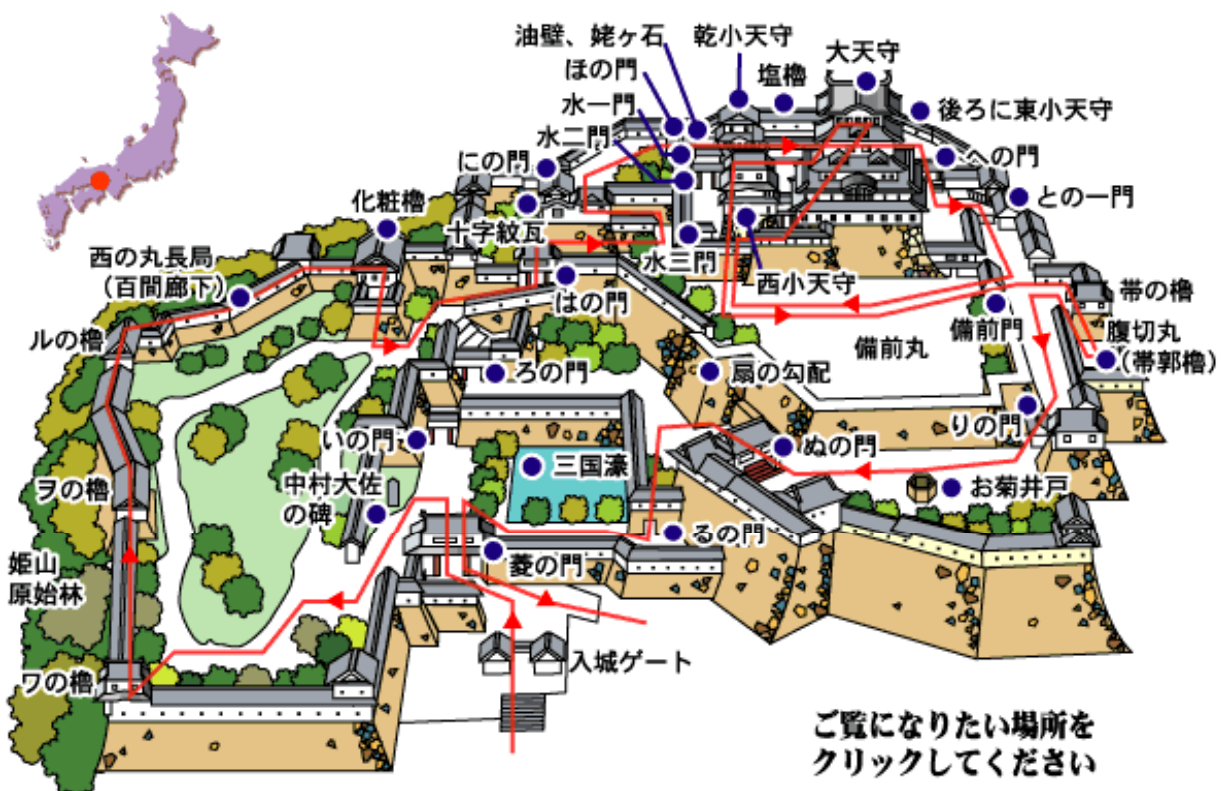
夫と息子を亡くした千姫は、その後姫路を離れ、尼となり江戸で七十歳までひっそりと余生を過ごしました。



姫路城内の国宝は、**大天守**（五重六階・地下一階）のみでなく、**西小天守**（三重三階・地下二階）、**東小天守**（三重三階・地下一階）、**乾小天守**（三重四階・地下一階）、



輝政から三代続き、現在の姫路城を築城した池田家の家紋は揚羽蝶(あげはちょう・写真下中央)で、最後の城主でもあり10代120年間城主を継いだ酒井家は剣酢漿(ケンカタバミ・上中央)、その間入れ替わりを繰り返したのが本多家、松平家(二家ある)、榊原家の四家で、徳川四天王の本多家は三つ葉立葵(ミツバタツアオイ・下右)、榊原家は源氏車(ゲンジグルマ・下左)、松平家が三つ巴(ミツドモエ・上左)。



姫路城を支える心柱



西の心柱(現在)



東の心柱(現在)



大改修前までの心柱

姫路城を支えているのがこの2本の大柱です。東西にそれぞれ高さ24.6m、根元直径95cm、末口42cmと大きな柱で、それぞれ地階から6階の床下まで延びています。

3階で注目したいのが、西の大柱が2本接ぎ合わされていることです。これは昭和の大改修(姫路城を一度解体し、もう一度組み上げたという大改修)の際、もっとも大変であった作業の一つでした。

そもそも不朽により大柱が姫路城を支えられなくなってきていたため、新しい大柱を建てるのが最大の課題でした。しかし、これほど大きな木材が見つからず困り果てた関係者が日本各地を探し回り、ようやく木曽国有林の樹齢780年の檜と地元神崎郡笠型神社の樹齢670年の檜を3階で継ぎ合わせて再現したのです。

一方東の大柱は根本の補強だけで、現在も古い柱が使われています。

大改修で取り替えられた大柱は姫路城三の丸広場の奥、入場券の発券所の右付近で現在見学することができます。

秀吉三層城の名残



油壁



姥ヶ石



十文字瓦

現在の姫路城は家康の意向により池田輝政が姫路に入城し、築城したもので、それ以前には豊臣秀吉が築いた三層の天守が建っていました。

秀吉が織田信長の部将として中国勢を撃つために播磨入りした時、姫路城主の黒田孝高は秀吉に力を貸し、やがて秀吉が播磨を平定すると姫路城を秀吉に譲りました。秀吉は姫路城を1年で三層の城に改築します。しかしその後、信長が倒れ豊臣家も破れると秀吉の姫路城はわずか20年で取り壊されてしまいました。しかし、その頃の城の一部が現在も残されています。

一つは「ほ」の門をくぐったすぐ上にある「油壁」。砂と粘土を塗り固めたもので、コンクリートほどの強度を持ち、鉄砲の弾もはじき返すと言われています。もう一つは「ほ」の門をくぐった所の天守のふもとにある「姥が石」。秀吉の城づくりの際、石垣に使う石が不足していました。そんな状況を知ったのか、ある老婆が「これを使ってください」と石臼をさしだしたと言われています。それを聞いた秀吉はたいそう喜び石臼を石垣に使いました。そんな話がたちまち広まり、領民たちはわれもわれもと様々な資材を提供するようになり、工事が順調に進んだと言われています。

そしてもう一つが「に」の西面(裏面)にある「黒田孝高の紋瓦」。秀吉に力を貸した功績として、秀吉の姫路城には黒田孝高の紋瓦が使われました。黒田孝高はキリシタン宗に帰依し、十字の紋瓦を使っていました。

狭間



鉄砲用



鉄砲用



弓用

姫路城の白壁には、長方形、丸、三角などのいろいろな形の穴が開いています。これは狭間(さま)と呼ばれるもので、侵入者を見張り、そして侵入者めがけてこの穴から矢や鉄砲で攻撃を仕掛けるために作られています。

丸と三角は鉄砲、長方形は弓を放つ窓で、それぞれの組み合わせや並びはバランス良く配列され、戦いの仕組みとしてだけではなく美しさを持ち合わせています。

狭間は天守と土塀を合わせて約500個ほど残っています。

himeji0001



himeji0002



himeji0003



himeji0004



himeji0005



himeji0006



himeji0007



himeji0008



himeji0009



himeji00010



himeji00011



himeji00012



himeji0013



himeji0014



himeji0015



himeji0016



himeji0017



himeji0018



himeji0019



himeji0020



himeji0021



himeji0022



himeji0023



himeji0024



himeji0025



himeji0026



himeji0027



himeji0028



himeji0029



himeji0030



himeji0031



himeji0032



himeji0033

